

許六『追善註千句』翻刻と略注(五)

牧 藍 子

本稿は、「許六『追善註千句』翻刻と略注(四)」「成蹊人文研究」第三〇号、令和三年三月刊)の前稿を継ぐものである。

【凡例】

- 一、句頭に番号を付した。
- 一、本文の行移りは原本とは一致しない。
- 一、振り仮名・送り仮名・濁点は全て底本のままとし、句読点などは私に付した。明らかに誤字と認められる文字には(ママ)と傍注した。

略注の中で引用する文献については、私に濁点・句読点等を付した。

- 一、漢字は原則として現行の字体に改めたが、一部そのままとした。
- 一、片仮名は「ハ」「ミ」など、変体仮名と認められるものは平仮名に改めたが、小文字で記されたものなど一部そのままとした。
- 一、仮名・漢字のおどり字「ヽ」、「ヾ」「〳」はそのままとした。

【翻刻・略注】

註千句

第五

1 水無月や身は黒木にて矢背小原

定家卿の曰、秀句は和哥の命也とのたまへり。矢背小原の秀句を第一の眼と見るへし。上の五七はむすひ也。ふかき心なし。すべて発句を一樣と心得へからず。此発句、させる事なけれ共、巻頭の句なり。たとひ能発句に巻頭にならぬ物多し。此境、能く見るへし。

一、※に逸丸筆写本に関する注記を示した。

△に林篁筆写専宗寺旧藏影写本との校異を示した。

◎に句の季などを示した。

○に略注を示した。

△「の給へり」「矢背ヤセ小原の秀句」。「むすひ」の「む」は右傍に補記。

「巻頭」ルビなし。「句也」「能ほ句」「よく〜」

◎「水無月」(夏)

○矢背小原「矢背」(八瀬)は比叡山西麓、「小原」(大原)は同北西麓に位置する小盆地で、いづれも黒木の産地。「黒木」は切り出した生木を蒸し焼きにしたものである。京の町にそれらを売り歩く大原女の姿が古くから知られ、定家も「秋の日に都をいそぐ賤の女がかへるほどなき大原のさと」(拾遺愚草・九八七)と詠んでいる。なお、自注にある「矢背小原の秀句」とは、「矢背・小原」の両地名に「瘦せ大原」(瘦せた大原女)の意が掛かっていることを指す。水無月は地上の水が涸れ尽くす酷暑の月、その厳しい暑さのなか黒木を頭にかけて売り歩く重労働のため、瘦せて日焼けした大原女の姿を詠んだもの。○秀句は和哥の命「秀句」とは、言いかげの技巧の優れた句のこと。「八雲御抄」巻第六「にくいげをこのむ事」に「大かたは、秀句は歌のみなもと、これをせんとする事なれど、あまりにくさりつゞけよめば、一定にくいげがそふ也。」、心敬の「ささめごと」に「秀句をば古人も歌のいのちといへり。いかにも嫌べきにあらず。」、心敬の師である正徹の『正徹物語』下巻に「歌に秀句が大專にて待る也。定家之未來記といふも、秀句の事を云ひたる也。」などである。なお、本句は『正風彦根体』(正徳二年(一七二二)刊)に入集する。

2 瓜売かさる藪の細道

す、しき木陰也。細道は芹生の里の傍。

◎「瓜」(夏)

○瓜売 瓜を売る人。ここは市中にやってきた瓜売が、草木の生い茂る小道を通って芹生の里に帰るさま。瓜は瓜類の総称で、『増山井』(寛文七年(二六六七)刊)「瓜」の項に「青瓜・から瓜・水瓜・あこだ・真桑瓜・胡瓜・姫瓜」を併出するのをはじめ、諸歳時記に様々な種類が載る。また『雍州府志』(貞享三年(一六八六)刊)巻六「土産門上 雑菜部」に「甜瓜・越瓜・乾瓜・冬瓜・西瓜・絲瓜・姫瓜・壺盧」が、『毛吹草』(正保二年(一六四五)刊)巻第四に「山城」の名物として「八条・浅瓜・九条・直桑・青瓜」が挙げられる。○芹生の里 京都市左京区大原の寂光院付近の地名。平安時代後期、大原が隠遁の聖地として脚光を浴びるとともに、歌枕として詠まれるようになった。『平治物語』『平家物語』でも大原の里とともに隠遁地として語られる。

3 かけろはぬ昼の榎に鳥鳴て

○かけろふ 日や月が陰って日陰になること。○榎 ニレ科の落葉高木で、高さ二〇メートル、直径一メートル以上に達する。近世には一里塚に植えられた。

4 横に流る、峯の浮雲

○浮雲 空に浮かび漂っている雲。前句の街道沿いの景から視点を上に向けた。

5 川船に堤の人とまねき合

伊駒の俳か。

○伊駒の俳 伊駒は生駒。奈良県北西部の地名で、大阪府南河内郡との境には生駒山がある。生駒を出してきたのは、前句の「峯の浮雲」から「君があたり見つつを居らむ生駒山雲なかくしそ雨は降るとも」(『万葉集』『伊勢物語』『新古今集』等)などを連想したか。『日本歴史地名大系 奈良県』(平凡社)「大和川」の項には、近世の本格的な水運は、片桐且元が亀ノ瀬の峡流を削通し、慶長年間に魚梁船を製造させたことに始まるとされ、上流は立野(現生駒郡三郷町)まで運航したというが、大和川の支流で生駒山麓を源とする竜田川については水が少なく舟運はなかったとされる。

6 食喰うちに出る有明

舟中。

◎有明(秋)

○有明 陰暦十六夜以後の月。発句や脇に月次の月名が出たときには、「月」の同字を避けるため(「月」は五句去)、「有明」などの語を用いて月の句が詠まれることが多い。第四百韻6句目参照。和歌

では、有明月がまだ空に残っている夜明けの情趣が多く詠まれるが、ここでは月の出が詠まれている。○舟中 ここは前句をふまえ、川に船を浮かべ遊興するさまを詠む。当時は屋形船で貴賤ともに遊宴した。なお、通行の多い河川には、煮炊き用のかまどを設け、船員や乗客に飲食物を売って回る煮売船という小舟があった。

7 取はつす鶉の声に「暮て

狩か

左近衛中将公衡、哥

かりくらし交野の真柴打敷て淀の河瀬の月を見る哉 此

哥、槌^{ツチ}破籠をつとふ時よめる哥なり。

△「狩暮て」「槌に」「つかふ時」「哥也」

◎「鶉」(秋)

○取はつす 取り逃がす。手に入れそこなう。○鶉 キジ科の鳥。全長約二〇センチメートルで、羽の色は地味。肉・卵が美味なために古くから狩猟の対象とされたが、江戸時代には鳴き声を愛でて飼育もされた。○狩暮る 狩をしているうちに日が暮れる。○左近衛中将公衡/哥 『新古今和歌集』に「鷹狩の心をよみ侍りける/かりくらし交野のましば折り敷きて淀の川瀬の月をみるかな」(冬歌・六八八)とあるほか、「歌枕名寄」にも載る。一日狩をして日が暮れ、交野の柴を折り敷いて身体を休めながら、淀川の瀬に映る月を見る風情を詠む。「破籠」は食物などを入れる木製の蓋付きの容器で、内

部に仕切りがあり、弁当箱として用いるが、本歌を「破籠をつかふ時よめる哥」とする伝承等については未詳。前句を淀川の乗合船の乗客のさまとみて、公衡の和歌を連想した。なお、淀川に煮売船が出ていたことについては、『和漢船用集』(宝暦二年(一七六一)序)巻第五に、「煎売船 所々にあり。小船にして酒肴を煎売するの舟也。あるひは餅くだもの、類をひさぐ。(中略)淀川筋にて、松か崎近辺にいたつて、昼夜往來の三十石舟に着て、酒食をす、め煎売するの舟なり。」という説明がみえる。

8 田をあからます秋の山風

◎「秋」(秋)

◎あからむ 赤くなる。麦の形容に用いられる例が多いが、「赤らむは日々にあら田の稲葉哉」整頁「元辰」(『崑山集』慶安四年(一六五二)刊)など田の形容に用いられた例もある。○山風 山から吹いてくる風。

9 賑やかに餅盛ル家子が器物

家子かうつわ物は飯碗の事なり。すへて郷中には喰物を

盛ル時、必飯碗を用ゆ。此事伊勢物語方出ツ。

△「餅盛ル餠子か」「事也」「より」

◎「餅」(冬)

◎家子が器物 『伊勢物語』二三段に、高安の女が「手づからいゝがひとりて、けこのうつはものにもりける」という描写がある。現行の諸注釈では「けこのうつはもの」について、「筥子の器物」で、食物を盛る器とされるが、『伊勢物語拾穂抄』(延宝八年(一六八〇)刊)では「けこ」に「真名伊勢物語に、餠子之器とかけり。家人など也」という傍注が付されており、許六は「けこ」を「家人」と解釈して「家子」と表記したと推察される。前句から豊作のさまを読みとり、たくさん盛られた餅を大勢で食べるさまを付けた。○郷中 いなか。里。

10 口鼻は噓にて爺はかり剃

前句は口鼻といふ字にて付きたり。か、はか、にてとい

ふは、いまた尼にならぬをいふ。郷中此類ひおほし。

△「爺」ルビなし。「付キ」

○口鼻 「噓」を「爺」の対として用い、「カ、」とルビをふった例としては、『本朝文選』(宝永三年(一七〇六)刊)所収の許六作「要文集/序」に「もろこしの鸚鵡といふ鳥は。(中略)父。母。爺。口鼻をよくぞまねける。」がある。「前句は口鼻といふ字にて付きたり」とは、前句の餅の香りや味を想像し、その香りを嗅いだり、味わったりする器官である「口鼻」を一句に詠み込むことで前句に応じていることをいったものか。

11 八幡の御坊へ下る御堂衆

江州の八幡、東西本願寺の御坊あり。毎年教化のため、

御堂衆下り説法有。

△「東西本願の」為一

○八幡の御坊 『日本歴史地名大系 滋賀県』「本願寺八幡別院」の項に「八幡御坊 近世には本山直轄の八幡御坊と称され、一四世寂如の頃より本山の御堂衆が交替で輪番として寺務をとり、近江の触頭として末寺統制の任にあたった」とあり、本願寺派第一三世宗主良如（一六一三〜一六二二）・一四世宗主寂如（一六五一〜一七二五）もしばしば下向したという。なお、本願寺八幡別院は本願寺派（西本願寺）であるが、自注によれば真宗大谷派（東本願寺）の寺院もあつたことになる。○御堂衆 浄土真宗で、宗祖親鸞の御影をまつた御影堂に参勤奉仕する僧。ここは、浄土真宗の僧徒が京都から近江八幡へ説法しに行くこと。

12 広い京でも喰ぬ菫蕪

八幡の名物なり。こんにやくの馳走、ほとらひよし。

△「広い京でも」「八まんの名物也」

○八幡の名物 こんにやくは、八幡菫蕪といつて、近江国八幡の名産であつた。『守貞謄稿』（嘉永六年（一八五三）成、慶応三年（一八六七）まで加筆 後巻之一「食類」に「菫蕪 京坂にては一つ二文、江戸は八文。また京坂の諺に、「坊主と菫蕪は田舎がよし」と

云ふことあり。すべて三都より他制に美あり。京坂にては、「はちまんこんにやく」を賞す。江州八幡の製を良とす。」とある。○ほとらひよし ここでは、前句の御堂衆をもてなす馳走として、付句に八幡菫蕪という素材をもってきたことをふさわしいものとして褒めてゐる。

13 晨明旅籠の外に銭出して

△「出でて」「新しき物也」
△晨明 ありあかし。一晚中ともしておく灯火。有明行灯とも。○旅籠 「旅籠銭」の略で、旅籠屋の宿泊代と食事代。ここではそのほか、灯火代も払うという句意になる。『日本国語大辞典』（小学館）「明代」の項には「有明行灯にともす灯油の代金。江戸時代では、木賃で泊まる安宿へ旅客が払う灯明代をいう。」とあるが、旅籠屋でも支払つたものか。「猿蓑」（元禄四年刊）「灰汁桶の」歌仙中の付合「冬空のあれに成たる北風 兆（凡兆）／旅の馳走に有明しをく 蕉（芭蕉）」からは、贅沢なものであつたことがうかがえる。○新らしきもの 許六は『宇陀法師』（元禄一五年刊）の中で「新敷と云は趣向に有。あたらしみと云は句作りに有。毎度あたらしき趣向は稀なる故、句作りにてあたらしみを付て云事也。」と「新敷」と「あたらしみ」を区別して説いている。

14 鐘の柄つとふ単追ふ音

ありあかしに銭を出ス旅、あまり下品ビツにあらすかし。

△文末の「かし」なし。

○つとふ 伝う。前句を有明代を払う余裕のある旅のさまと見込み、主人につき従う鐘持の旅宿のさまを付けた。

15 小細工の切籠張ッたる玄関番

切籠よし。灯籠よからず。

△「小細工に」

◎「切籠」(秋)

○小細工 こまごまとした手先の仕事。○切籠 きりこ。切子灯籠のことで、盆灯籠の一種。角形の灯籠の角を切り落した形をしており、角ごとに造花をつけて紙片を垂らし、下部の四方には幅広の幡を下げる。『守貞謄稿』巻二七では図を示し、近世後期には提灯を代りに用いるとする。『和漢三才図会』(正徳二年序)巻三二「灯籠」の項に「一種、岐里古灯籠、聖霊祭等に之を用ふ。飾る所の紙、総じて甚だ華美なり。」(原文の返り点、送り仮名にしたがって私に書き下した)とある。ここは、玄関番が切子灯籠の準備をするさま。○玄関番 玄関に詰めていて来客の取り次ぎをする役の者。「切籠よし。灯籠よからず。」という注は、「灯籠」ではなく「切籠」と詠むことで、「切子灯籠」であることが明確になる点を自讃したもの。

16 二親フツクツヤもたぬ盆も来にけり

△「二親」ルビなし。

◎「盆」(秋)

○盆 盂蘭盆。前句の切子灯籠からの連想。

17 此町チチヨウは人も通らず月の影

却て盆のさひしきをいふ。

◎「月」(秋)

△「淋しき」

○町 音読譜号が付されることから「ちよう」と読む。『日本大百科全書』(小学館)「町衆」の項では「町衆」を「ちようしゅう」と呼ぶ理由として、「京都では、通りのことを「まち」、両側町の町を「ちよう」といふ」と説明しており、これにしたがえば「此町」は通りそのものではなく、通りを挟んだ両側の家並みまでも意識した表現ということになる。

18 板橋越る夜廻りの棒

○板橋 橋桁の上に板を並べて作った橋。○夜廻り 夜、禁裏・城中・屋敷内などを、警備のために回り歩くこと。また、その人。なお、冬期の用心時にする夜回り(火の番)は近代以降冬の季語とされるが、近世の諸歳時記には載らない。夜廻りは、提灯をさげ、先端に鉄輪のついた鉄棒を地面に突いたり引きずったりして、音を立て

てながら行ったので、板橋の上を通ると特に大きな音がした。

19 高声は皆吝氣にて泣わめき

市中の夜更。

△「みな」

◎「吝氣」(恋)

○高声 高く大きな声。ここは嫉妬する女性の声。

20 割かけたる汁の菜蕪

かけるといふ所にて付たり。

△「刻かけたる」キレ「菜蕪」訓読譜号なし。

○菜蕪 訓読譜号があるので「なかぶら」と読む。汁の具材。前句を、日常のちよつとしたことから起こった夫婦喧嘩とみて、汁の具材が刻みかけのまま放置されている状況を付けた。

21 見事なる華見の戻り着連立

△「花見」

◎「華見」(花)

○着連立 江戸時代には、花見に行く際、美しく着飾って出かけた。

ここは、夕方の食事の準備が行われる頃、美しい花見衣装を着た女性たちがそろって花見から戻ってくるさま。

22 浜は桜を打寄る貝

花に桜、桜に花を付る事、習あり。口伝。さくら貝はす

たれ貝の事なりと、新式の伝に云々。

△「花付る」ハナツク「習有」。「口伝」なし。「事也」

◎「桜(桜貝)」(春)

○花に桜 貞徳著『天水抄』(寛永二年(一六四四)成)に「花に桜を付る事(似せ物の花の時可然。真の花は、なみ木・何本・幾木と、桜に詞を入れて付る事口伝。)」とあり、許六自筆の伝書『俳諧新々式』(許六が元禄六年三月に芭蕉から相伝したものを、正徳五年六月に治天に伝授した)には、「花といふは桜の事にして、桜は正花にあらず。花に桜付る事、花の春、花の袖、花衣などいふに付る也。付句大事也。／辛崎の松は花より臙にてはせを／山は桜をしほる春雨／かやうにするなり。」とある。また芭蕉に仮託した支考作と目される『二十五箇条』(享保二年(一七三六)刊)には「花に桜つくる事 世に花といふは、桜の事なりといふ人も有れど、花とは万物の心の花なり。たとへば花婿・はな姫の類、茶の出ばな、染もののはなやかなるも、そのもの／＼の正花なれば、花と賞翫の二字にさだまりぬ。いづれのはなにも春の季にして、植物に三句去べし。花は春の發生する物なれば也。古へより花に桜を付る事、伝授あると、初心にはゆるさず。或は桜鯛の類など前の花にあらざる桜ならば、あきらかにしつて附べきなり。花前のうへものとても、此類にて知るべし。但、花は桜にあらず、桜にあらざるにもあらずといふ事、

我家の伝受とするべし。」と詳述する。○さくら貝 マルスタレガイ科の二枚貝。淡紅色で、殻長約三センチメートル。殻は内外とも桜色で光沢がある。○すたれ貝 ニッコウガイ科の二枚貝で、殻長約九センチメートル。表面にすたれ状の太い輪脈があり、淡褐色の地に栗色をした四条の放射帯がある。○新式 『連歌新式追加并新式今案等』には「可分別物」に「桜貝(名に付て可為春歌云々)」が挙げられるが、すたれ貝と同一とする記述はない。『俳諧新々式』には「桜貝、すたれ貝の事也」とある。

二

23 うつつりと霞の中の帆懸舟

景曲第一。

◎「霞」(春)

○うつつり うつすら。許六は『深川』「洗足に」歌仙(元禄五年一二月上旬成、連衆は酒堂・許六・芭蕉・嵐蘭)で「うつつりと門の瓦に雪降て」、「とをめがね」(宝永七年成)第一歌仙で「うつつりと羽織に月の影さして」と、この語を好んで用いている。○景曲 許六は『宇陀法師』の中で「景曲の句」として「春風や麦の中行水の音 木導」を挙げ、「景氣の句、世間容易にする、以の外の事也。大事の物也。連哥に景曲と云、いにしへの宗匠ふかくつ、しみ、一代一両句^二は過ず。景氣の句、初心まねよき故、深いましめり。俳諧は連哥程はいまず。惣別景氣の句は皆ふるし。一句の曲なくては成が

たき故、つよくいましめ置たる也。木導が春風、景曲第一の句也。」という芭蕉の言葉を記す。なお、許六は『宇陀法師』以外にも、『俳諧問答』(元禄一二年奥)をはじめとする諸書の句評等で「景曲」の語を頻繁に用いている。

24 晴たる不二に下の足高

おなしく絵を見るかことし。

△「見ることし」

○下 ふもと。山脚。○足高 足が長くみえるさま。ここは富士山に雲がかからず、麓の方まで全体が見えるさま。

25 いたひけな冶郎供する馬の跡

△「治良」

○冶郎 若い男。ここは前句を旅の句に転じた。

26 針て耳搔針立の知恵

つかぬ句なり。江戸、医者・針立の送迎は馬なり。冶郎は供なり。

△「智恵」「句也」「馬也」

○針 『和漢三才図会』卷一五「技芸」の「鍼」の項に、医術に用いる針として鑢針・員針・鍔針・鋒針・鍔針・員利針・毫針・長針・大針の九種類が挙げられる。編者寺島良安によると、当時これら九

種類の針はどれもみな用いられたわけではないようであるが、身体に打ち入れるだけでなく、皮膚を撫でこすったり、膿を取ったりする針もあり、形状として必ずしも先端が鋭く尖ったものばかりではないことがわかる。○針立 鍼医。前句を医者への送迎と見変えた。

27 昼酒に吸物なしの蓋茶碗

○蓋茶碗 蓋つきの茶碗。

28 冷食されて内義汗かく

無遠慮の亭主をいふ。

○冷食 ひやめし。○無遠慮 他にはばかることなくふるまうさま。飯の残り具合などおかまいなしに食べる亭主に妻は気がでない。なお、『守貞謄稿』後卷之二「食類」の「飯」の項には、「平日の飯、京坂は午食、俗に云ふひるめし、あるひは中食と云ひ、これを炊く。(中略) 江戸は、朝に炊き、味噌汁を合せ、昼と夕べは冷飯を専らとす。」とあり、上方と江戸では炊飯の時間帯が異なっていた。

29 赤熊出て黍の広葉の風の音

其日の風情を云。

△「いふ」

◎「黍」(秋)

○赤熊 赤く染めた白熊(はくま)(ウシ科の動物ヤクの尾の毛)。払子、かぶ

りもの、かつらを作ったり、旗、槍、兜を裝飾したりするのに用いられる。ここは黍の穂をたとえる。『武蔵曲』(天和二年(一六八二)刊)所収の千春独吟歌仙に「首とりひしぐ西瓜怪物／唐粗(カビ)の赤熊(ツ)の角薄」という例がみえる。○黍 イネ科の一年草で、五穀の一つとして古くから栽培される。イネに似るが、茎は高さ約一メートルに達し、葉は幅が広い。穂は細長い多くの枝に分かれて垂れ下がる。

30 屋ねを見てゐる秋のゆふ暮

市中の夕暮。

△「居る」「夕くれ」「市中ノ」

◎「秋」(秋)

31 煮出茶の出かねてうすき月の色

さひしき所を付たり。

△「出」

◎「月」(秋)

○うすき月の色 月の色が薄いと、「暮秋曉月／色うすし月も在明になるままに桂も紅葉ちりや添らん」(雲玉集・二五四)などの例から、月の光が弱いさまをいう。「うすき」は、煮出した茶の色と月の色の両方に掛かる。

32 師匠をとつて習ふ唐經

近世、洒落の俗人^{ヲ云}。

△「をいふ」

○唐經 唐時代の經典。○洒落 垢抜けて洒脱なさま。○俗人 出家していない世俗の人。

33 喰つけぬ粥腹はつて疝氣持

世俗に葉鑑仏法といふものあり。急^レにしてさめやすき事なり。喰つけぬ粥飯、精進料理の水くさきは、かならず

疝氣にあたる。

※「くさき」の「さ」は右傍に補記。

△「世話に」「いふ物」「事也」

○粥腹 粥ばかり食べていて、気力や体力のない状態をいう。前句の人物を、にわか^レに信心を起こして仏道修行に励む人物と見変えた。○疝氣 下腹部の疼痛を症状とする病氣。○水くさし 水分が多すぎて味の薄いさま。また、甘味や塩味の少ないさま。

34 顔をふつて自脈とらるゝ

あまり養生ふかき人は見るめくるし。

△「とらるる」「見る目」

○顔 頭。当時、医者によつて行われた脈診は、人差し指・中指・薬指の三指を当てて、手の橈骨動脈（手首の親指側を走る動脈）の

拍動を診るものであった。漢方医学では特に重視し、脈診によつて病氣を診断した（『日本史小百科20 医学』（近藤出版社、一九八五年）「43四診法の伝統」）。ただし、ここは専門的な脈診ではなく、自分で自分の脈を取つている場面である。「とらるゝ」と尊敬の意が表れていることから、身分の高い人物が想定されているか。○自脈 自分の脈。○見るめくるし 人目をはばからないさま。ここはちよつとした身体の不調に対して過度に神経質になるさまを評した。

35 袈裟かけて和尚を真似る小僧共

和尚の留主。自脈とるは和尚の僻也^{ソセマヤ}。

△「脈」「僻」

36 また一番の果ぬ長風呂

叢林。

○一番 一番風呂。寺社などでは、風呂を一日に何回か沸かして入浴しており、その日の一番最初の風呂をいう。○叢林 禪宗の寺院。多数の修行者が集つて修行しているところを、大木の叢生している林にたとえていう。

二ウ

37 どうくくと松の間の沖津波

やり句。

○どうく 水が勢いよく流れる音や、波がはげしく打ちよせる音、風が強く吹く音などを表わす語。○沖津波 沖に立つ波。

38 背中見送る鳥のから声

黄檗南源ノ詩に、遠ク看ニ飛一鳥、背一近クハ聴ク懶一鳩ノ声一。
洛ノ獅谷ノ作。

△「南源ノ詩」「背」ルビなし。

○から声 かすれてよく通らない声。しわがれ声。○南源 明の黄檗僧、南源性派（一六三一〜九二）。承応三年（一六五四）に隠元隆琦とともに来日し、長崎興福寺に入る。宇治万福寺の開創に尽くし、延宝八年撰津国分寺の住持となる。著作としては『南源和尚語録』『芝林集』のほか、漢詩集『葺林集』や漢詩文集『東遊草』を残す。

○獅谷 鹿ヶ谷。京都市左京区南部の地名。現京都市左京区鹿ヶ谷町。東山の主峰如意岳の西麓、吉田、神楽岡に及ぶ地域で、俊寛らが平家追討を密議した山荘があった。

39 硯石負ふて腰のす峯つたひ

○硯石 硯を作るのに用いる石。『和漢三才図会』巻一五「硯」、『北窓瑣談』（文政一二年（一八二九）刊）後編卷之四や「話一言」（安政四年（一七七五）頃）文政五年頃にわたる筆録「京師硯匠名石目録」などに多くの産地を挙げ、色や模様、密度、堅さ等の観点から評価されている。○峯つたひ 峰を伝って行くこと。

40 霧立こめる覚一明か寺

大夫坊覚明は叡山の衆徒。平ノ入道に憎まれ、山を逃て木曾に仕ふ。高嶋硯の製、覚明はしめて彫ル之。是より名物と称ス。

△「称」音読譜号なし。

◎「霧」（秋）

○覚明 木曾義仲の右筆で、『平家物語』に大夫房覚明として活躍する。以仁王挙兵の際に興福寺の返牒を代作して、清盛から逃れて亡命、源行家とともに義仲に従った。義仲敗亡の後箱根山にいたが、頼朝に知られて山内に禁足され、やがて叡山に戻って慈円の下に寄寓し、のち法然の弟子になったとも、親鸞に従ったともされる。○高嶋硯 高島石でつくった硯。『毛吹草』巻第四に「近江」の名物として「高嶋硯」が挙げられる。前述の『和漢三才図会』『北窓瑣談』『話一言』、いずれも硯石の産地として高嶋の名を挙げるが、これを覚明がはじめて彫ったという記述はない。滋賀県立琵琶湖文化館のホームページ（http://www.biwakobunkakan.jp/db/db_03/db_03_008.html）には、織田信長による比叡山の焼き討ちから逃れた能登氏の末裔が始めたものとされる。なお、『日本歴史地名大系 滋賀県』『打下村』の項には、鴨川支流の八田川上流の硯石谷と長尾山から硯の原石が採れ、大溝町などの細工人により加工されて、大溝藩の専売品として流通したという記述がある。

41 食焼に登れば残る朝月夜

叡山の下男は常住坂本に居す。朝登りて、夕飯を仕舞と眠
藏をしめて、又坂本に下る。児のひたるかるといふ咄し
も是より出づ。

△「咄も」

◎「朝月夜」(秋)

○朝月夜 月が残っている明け方。またその有明の月。○常住 ふ
だん。○坂本 比叡山の東部、琵琶湖岸にわたる一帯。坂本は延暦
寺の坂下の意。『日本歴史地名大系 滋賀県』「坂本」の項によると、
下男だけでなく、僧侶階級の上(衆徒)・中(堂衆)・公人(山
徒)のうち、公人も妻帯して坂本の里坊に暮しており、近世には天
台座主が坂本の滋賀院に常住したために山を下りる僧侶も増え、山
上での修行僧も六〇歳を過ぎると天台座主から里坊を与えられたと
される。○眠藏 寝所としたり、家具をしまっておいたりする部屋。
○児のひたるかるといふ咄し 『宇治拾遺物語』卷一ノ二二「児のか
い餅するに空寝したる事」を指す。

42 茄子角豆の秋も暮行

◎「秋も暮行」(秋)

○角豆 マメ科の一年草。花は白または淡紅色で夏開き、秋に細長
い実を結び、食用となる。なお、「茄子」も「角豆」も近世諸歳時記
では夏の詞とされるが、いずれも『増山井』『俳諧をだまき』(元禄

四年刊)の「玉まつり」、『通俗志』(享保二年序)の「盆供」の項に
も挙げられる。

43 挑灯をつなひて上ヶる糘町

繫

なすひ、さ、けの市、糘町にあり。新道、挑灯屋多し。

△「繫て」
いくつもつなきて、竹のさきにさ、けて干す。

△「糘町」

○糘町 麹町の内堀の半蔵御門から外堀の四谷御門外まで続く甲州
道に沿いの一帯。徳川家康入府直後に町屋が開かれ、江戸城に一番
近い町である。国立国会図書館が公開する「江戸切絵図」(尾張屋
版、嘉永二年(文久二年(一八四九(六二))のうち「四ツ谷絵図」
[[https://www.dnld.jp/api/iii/1286668/R0000001/Full/Full/0/
default.jpg](https://www.dnld.jp/api/iii/1286668/R0000001/Full/Full/0/default.jpg)])を見ると、四ツ谷御門前、麹町一丁目、四谷伝馬町一
丁目に接するところに「新道」云との記載がある。

44 万部参りの婆々の空尻

糘町は四ツ谷海道、万部は増上寺にあり。

△「四ツ谷」

○万部 万部経の略で、追善や祈願などのために、万部の経典を読む
こと。浄土宗では、江戸初期から万部会が行われた。○空尻 旅人一
人が乗り、小付や布団などのほかに五貫目未満の荷物を付けること

ができる道中馬。代金は本馬のおよそ半分強である。○増上寺 江戸の芝にある浄土宗の寺。平安初期、紀尾井町の貝塚に宗叡が開いた古義真言宗の光明寺にはじまり、元中二年（一三八五）に聖聰が浄土宗に改宗し、以後、江戸の浄土宗寺院としてその学問所となった。徳川家康が江戸に入府後はその菩提所となり、芝の現地に移る。徳川家の庇護が厚く、関東浄土宗寺院の総本山となり、十八檀林の冠首として関東の諸寺院を統括し、実質的には浄土宗第一の実力をもった。

45 麦時の俄に変わる冬天気

江戸はつれの天気。

◎「麦薪」「冬」（冬）

○麦時 麦の種を畑にまくこと。近世前期諸歳時記に一〇月として所出。

46 牛の糞取ル山よせの里

牛のふんとるは山里なり。洪紅葉の村。

※「洪紅葉」は「柿」の脱落か。

△「糞とるは山里也」「洪柿紅葉」

○山よせ 山のそば。○洪柿紅葉の村 秋の深まる里のさまをいう。

47 此度も用いた、すを産出して

用いた、す、むすめ也。亭主の立腹。

△「た、ずを」

48 百々も吞せず飼家時なり

やまひに葉、古来より噂とす。されと蚕時、煎葉の匂ひ、

田家大キに忌む。蚕飼、煎葉の逃也。百々は金瘡の葉。

◎「飼家」（春）

○百々 『近江国輿地志略』（享保一九年成）卷七七「坂田郡 百々村」の項に「此処に百々葉と云妙葉あり。此葉、本名龍方訣と号し、佐々木家伝来の秘法なり。本此地にて売葉渡世の業とせし故、專百々葉とは呼て（中略）金瘡・打身・産前産後の良葉なり」とある。○飼家時 蚕飼の時季。三月、卵からかえったばかりの蚕を蚕卵紙から掃き取って蚕座などへ移した後、三、四〇日の間のことで、蚕飼の農家は多忙を極める。この間、日々多量の桑の葉を摘んで幼虫に与え、体が透きとおり桑を食べなくなったら蚕棚に移して繭を作らせる。近世中期以降、幕府による生糸の輸入制限や幕府・諸藩の財政建て直しの面から養蚕が奨励され、国内の養蚕業が発展した。主要な産地は近畿・中国であったが、順次東国へ移り、奥羽・関東・中部にも優れた産地が生まれた（『事典 しらべる江戸時代』（柏書房、二〇〇一）「養蚕」）。また『養蚕秘録』（享和三年（一八一三）刊）上巻「蚕に毒忌ある事」に「第一たばこの類、雀の糞つきたる

桑、山椒の匂ひ、油氣、塩氣、漆の木、胡桃の木、杉の木の近所にある桑、牛馬の糞付たる桑、うなぎを焼事、惣して悪き臭ひの物焼べからず。或は、門前などを、悪き臭ひの魚肉又は糞など持通ば、急ぎ戸を閉べし。」とあり、蚕の卵に強い匂いのするものは嚴禁とされていた。○噂 噂付。前句の説明となるなどして、句想が同意になるような付け方をいい、一巻の展開を滞らせるものとして嫌われた。

ここは産後の場面を描いた前句に対して、出産直後の女性に飲ませる百々葉を付けていることを指す。○蚕飼、煎葉の逃 煎葉の名を出してはいるものの、蚕飼の場面に転じたことで、前句から離れているため、噂付の難を逃れているということか。○金瘡 刃物・矢など、金属製のものによってできた切り傷。

49 花も木も鼻に付_キたる汁のかざ

かい子時、むつかしきは、かならず食をむさふる比也。
△「むつかしき比は」「むすふる」

◎「花」(春)

○かざ におい。○むさふる むさぼる。

50 のりすり仕たる温泉入日永し

硫黄の香ざ。

△「温泉入」

◎「日永し」(春)

○のりすり 『日本方言大辞典』(小学館)「伸り反り」に、「進退窮まること。のつびきならぬこと。《のりすり》とも。」とあり、滋賀県蒲生郡「のりそりする」の例を挙げる。「のりすり」と「のりそり」が通じるとすれば、ここは身体を伸ばしたり反らしたりする動作をいうか。○日永し 春の日がなかなか暮れないさま。

三

51 黽穴の在所見に行春の雨

丹生の山田に黽_ム左衛門と云者あり。庭に穴あり。つゆ穴といふ。梅雨の入_ツよりあけの日まで水湧出_ツ。常はから池也。有馬の奥也。

△「といふ者」

◎「春の雨」(春)

○黽穴 例年、梅雨の時期に雨が連続と水が湧き出す穴。また、「梅雨の井」といって、水が地上にあふれ出る井戸もある。京都烏丸の梅雨穴と、本句で詠まれる摂津国八部郡莊原野村白滝弁財天祠にある栗花_ツ落井が有名だが各地にある。○黽左衛門 『和漢三才図会』巻三「天象部」の「梅雨」に「摂州丹生の山田の村長栗花利左衛門と云名の者有り。其後園に穴を生ず。凡立春以後百三十五日に逢ひて始て穴を生ず。穴の多少を以て日数を知る」(原文の返り点、送り仮名にしたがって私に書き下した)と見える。また『摂陽群談』(元禄一四年刊)巻八「田の部」の「梅雨井」、「兵庫名所記」(宝永七年刊)

下巻「梅雨井」に、丹生山田庄原野村の栗花落氏宅内の井で、普段水はないが、梅雨に入ると必ず水が湧き出てくると紹介される。また両書には、淳仁天皇の御代に朝廷に仕えていた始祖の山田左衛門尉真勝が、右大臣藤原豊成の息女で中将姫の妹である白滝姫を恋わびて和歌を贈り、その心ざしの深さゆえ白滝姫を得た。その後、一男を産んで没した白滝姫の遺骸を屋敷の東境に納て弁財天として祀ると、この地に水がわき出して今にいたるまで梅雨を知らせるといふ伝説が載る。○丹生の山田 撰津国八部郡。播磨との国境付近にある（『日本歴史地名大系 兵庫県』「山田庄」）。

52 茶を持つて出ル兵法の弟子

つゆ左衛門は侍筋にて、今に武士道を励む。一ノ谷の時、
弁慶、鷲尾をつれ来りて、鴨越の案内とす。鷲尾も此在
所、今に子孫あり。つゆ左衛門と智勇なり。

△「智勇也」

○侍筋 武士の家柄。○鷲尾 鷲尾三郎義久。狐師の子であったが、一ノ谷の戦いとき源義経の臣となつて鴨越で先導し、屋島・壇ノ浦の戦いなどで活躍した。のち奥州に逃れる義経にしたがい、義経とともに衣川で戦死した。『日本歴史地名大系 兵庫県』「東下村」には「当村にあつた鷲尾家は、一ノ谷の戦に源義経一行を先導した鷲尾三郎義久（『平家物語』巻九）の後裔と伝え、「撰津名所図会」（執筆者注・矢田部郡下「丹生谷鷲尾旧屋」の項）によると弁慶と亀井六郎か

ら贈られたという太刀二振が家宝として伝来していた。」とある。

53 爪たて、拾ふ畳のみたけ銭

兵法の弟子か袂よりこぼす。大脇指ノ長柄、茶屋につかへたり。

△「拾ふ」を「捨ふ」と誤記。「大脇さしの」

○みたけ銭 銭ぜに緋びに通さないで取り散らしてある銭。ばら銭。○大脇指 刃わたりが一尺七寸から一尺九寸までの長大な脇差。江戸時代には、表向き大刀を差せない町人なども用いたというが、ここは刀のとりまわしの未熟な武士のさま。

54 談義はすんで陳皮投込む

別にあり。紙屑籠よりはちいさし。

○談義 本来は仏法の法義を限られた人数で談ずることであったが、やがて聴衆に対して平易に法義を説法する意となり、講談や落語に似た話柄や語り口で興行的に行われ、娯楽本位になっていった。幕府や寺院ではたびたび禁令を出す、元禄から享保にかけて隆盛を極めた。○陳皮 ミカンの皮を干したもの。特有の芳香と苦味がある。健胃・鎮咳・去痰剤として用いられた。ここは談義僧への布施として、銭とは別に喉に効く陳皮が投げ込まれるさま。

55 私語サ、ヤイて覗く浅野の素牢人

名を隠す内匠殿、牢人住、寺のやつかい。

○素牢人 浪人を卑しめていう語。素寒貧の浪人。○内匠殿 播磨赤穂城主、浅野長矩。元禄一四年、勅使の御馳走役を命じられ、勅使らが到着する直前、江戸城本丸の松之廊下で高家肝煎の吉良義央に斬りつけ、傷を負わせたために捕らえられて、ただちに切腹・改易の処分を受けた。そして翌年一二月、遣臣である大石内蔵助良雄以下四七人が本所の吉良邸に討ち入り、吉良義央らを討った。これら一連の出来事を赤穂事件と呼ぶ。

56 憤鼻フドシ禪洗ゼンシふて夜干シする月

◎「月」(秋)

△「月」ツキ

57 水汲のいつより多き盆の中

◎「盆」(秋)

○いつより 普段より。

58 施餓鬼に逢た戻マシの肩衣

此水は寺の井なり。戻の肩衣は寺もとり也。

△「逢ふた」「井也」

◎「施餓鬼」(秋)

○施餓鬼 餓鬼道に落ちて苦しむ餓鬼や、成仏しない無縁の亡者に飲食を施して救い、施主自身も長寿を願う仏事。本来、時節を限らず行われたが、孟蘭盆会と混同され、近世には七月一日から一五日までの間に盛んに行われた。○戻 縦ヨシ。縦横ともに絹または麻のより糸で目を粗く織った布。法衣や夏の衣に用いる。

59 恋にする大根売を連レして来て

盆まつりに大こん売、待侘ひ所。

◎「恋」(恋)

○恋 ここは恋人。○大根売 大根を売り歩くこと。また、その人。『絵でよむ 江戸のくらし風俗大事典』(柏書房、二〇〇四年)に、天秤棒で大根の荷をかついだり、馬の背に大根を載せて市中に売りに来たりする人物の絵が紹介される。○盆まつり 孟蘭盆のこと。

60 裏から内へ這入ル前たれ

内の口鼻也。

○前たれ 着物が汚れるのを防ぐために、特に腰から下の体の前面を覆うように垂れ掛ける布。男女ともに着用し、商家や客商売の者だけでなく、町家の女性も普段の仕事の際に着用した。恋離れの句。

61 つツはらす餉付物ウケモノに蠅飛シて

木綿洗濯は、しんしを内にかふてつ、はらす物也。

△「つゝ、はらす」

◎「蠅」(夏)

○餵付物 ぴんとさせるために糊をつけた洗濯物。○しんし 簇しんし。

両端に針のついた竹の串。布の洗い張りや染め付けのときに、しわを張り伸ばすように布の両端にまたがらせて等間隔に刺し留めた。

○かふ 支かふ。当てがって支えにする。つかいをする。

62 藪に夕日の残る屋ね形ナリ

景曲。

63 土こねて塀十郎の蔵普請

木六竹八塀十郎と世話に云。塀十郎は十月の月の出の句

をいふ。

△「世話にいふ」「塀十良は」「十月の出の句」

◎句意から冬。

○木六竹八塀十郎 木は陰暦六月、竹は陰暦八月に切るとよく、土塀は乾燥した陰暦十月に塗るのがよいという意味を、人の名前にいなししたもの。『譬喩尽』(寛政末)に「屏十郎とて壁塗には十月吉といへり」、『尾張俗諺』増筆部(天保年間)に「木六竹八塀十臘」と載る。「塀十郎」は諸歳時記に未収録であるが、ここは冬の句とみたい。○世話 世間のいいくさや慣用のことば。

64 金ありそうで持ぬ浜町

大津の衰微、家はかりいかし。

△「浜町」訓読譜号なし。

○浜町 現滋賀県大津市内の地名。○大津の衰微 大津は琵琶湖に臨む港津で、東海・東山・北陸三道の要路に当り、古くから交通・商業の要地として繁栄した。近世には東海道の宿場町、琵琶湖水運の港町として繁栄し、園城寺の門前町としてにぎわいを呈した。しかし、一七世紀半ばには西廻航路が開発されたことにより、湖上交通に依存していた町の経済的位置は低下した(『日本歴史地名大系 滋賀県』「大津市」)。○いかし 大きい。多い。

三ウ

65 請出して親が死ぬると内へ入レ

傾城のぬけ。

◎句意から恋。

○請出 遊女を身請けすること。○内へ入レ ここは自宅内に妾として置くのではなく、妻として迎える意か。○傾城のぬけ 一句に「傾城」の語を用いることなく、傾城を詠んだ句であることを暗示した句であることをいう。「ぬけ」は談林俳諧で好んで用いられた手法である。

66 筭わげのさすか世の中

傾城、地女に変する時、必かうかいわけと成ル。

△「筭」「必」

◎句意から恋。

○筭わけ 筭鬘とも。筭を使って、それに髪をまきつける鬘の系統をいう。普段、下げ髪にしている宮中や武家に仕える女性たちが、仮に髪を束ねるために、筭をさしてしめておいたのが起源とされる。江戸時代に入って結い方が定まり、貞享・元禄頃には民間の女性たちにも広まった。結い方の詳しい点は十分に明らかではないが、筭を用いることにより、鬘の形に変化を出すことができ、いろいろな技巧が凝らされた(金沢康隆『江戸結髪史 新装改訂版』青蛙房、一九九八年)。○地女 売色を業とする女性に対して、素人の女性をいう。

67 面かはる鏡の家の鉢ひらき

渡世に髪すりて鉢ひらきの尼となる、かならず鏡の家を

鉢の子とす。

△「面」

○鏡の家 鏡を入れる箱。鏡箱。○鉢ひらき 托鉢して歩く僧形の乞食。女性の場合、鉢開婆・鉢婆という。ここは、剃髪して初めて鉢を使用することも掛ける。○髪する 髪を剃る。○鉢の子 僧尼が托鉢のときに持つ器。石・鉄・陶製などがある。

68 跣て糶をさがす門口

麦時糶時分、村々鉢ひらき多し。

△「門口」訓読譜号なし。

◎句意から秋。

○麦時 新麦ができる時節。麦時分。「落着の古郷やてうど麦時分 杉風」(『別座鋪』元禄七年奥)。○糶時分 糶は穀をかぶっている穀物の実で、特にまだ脱穀していない米のこと。本句は鉢開きが稲扱のあとにこぼれた糶を探すさまを詠む。なお、近世前期諸歳時記においては「糶」そのものは立項されないが、稲穂から糶米を分離する「稲こく」が『誹諧新式』(元禄一二年刊)に八月、『通俗志』に兼三秋と所出。

69 蝻喰ふ猫の眼のくさりはて

△「蝻」ルビなし。

◎「蝻」(秋)

○蝻 バッタ科の昆虫の総称。大きさは三、四センチメートル、色は黄緑色である。後肢が強大でよく跳躍する。初夏に孵化し、夏秋の間、稲や藁の田に集って葉を食い荒す。『和漢三才図会』卷五三「化生類」の「蝻蝻」に「之を取りて炙り食へば、味甘美、小蝦の如し」とあるように食用ともされる。○くさりはて すっかりただれてしまふ。

70 手水つかふて下駄の永キ夜

◎永キ夜（秋）

○手水つかふ ことは用便を済ますこと。○永キ夜 秋や冬の長い夜。ここは秋の三句目。

71 歌数寄の児を追出す宵の月

恵信、僧都、横川に住給ひける比、哥数寄の児一人あり。残る児共、これを習ひて哥に心をよせ、学文をすさむ。

恵信、此児のわさなりとて、里へ帰さんと申給ふ。宵、庭に出て手水をつかひなから月を詠めて

手にむすふ水にやとれる月かけの
あるかなきかの世にもすむ哉と

いふ古哥を吟しけるを僧都聞給ひ、哥は無常のなかたちとなるものなりと、是よりゆるして哥をよませ、自ミツカウもよみ給ふとなり。

△「恵信、僧都」が「恵信僧都」。「恵心、此児」「帰カヘさん」「なかめて」「月影」「き、給ひ」「なるもの也」「と也」

◎「宵の月」（秋）

○恵信 源信。平安中期の天台宗の学僧。大和国葛城郡当麻郷に生まれ、九歳のとき比叡山に登り、良源に師事した。横川恵心院にあつて修行と著述に従事したので、横川僧都、恵心僧都とも称され、代表的な著作に『往生要集』三巻がある。注で指摘される話は『沙

石集』巻五「学生の歌好みたる事」を指す。○横川 東塔、西塔と

並ぶ比叡山延暦寺の三塔の一。○すさむ 嫌って遠ざける。○手にむすふ 『拾遺和歌集』に「世中心細くおぼえて、常ならぬ心地し侍ければ、公忠朝臣のもとに詠みて遣はしける、この間病重くなりけり 手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にこそありけれ この歌詠み侍て、ほどなく亡くなりける、となん、家の集に書きて侍」（一三三二・紀貫之）と載る歌で、「世にもすむ哉」の形は『沙石集』のほか『宝物集』『保元物語』にも見える。○無常のなかたち 世の無常を悟る機会となるということ。

72 指ユビて涙を拭ヌグふ塗ヌリもの

△「塗物」

○塗もの 漆を塗つて作った器物。ここは形見の品。

73 いやといふ文を燃火につゝこんで

不叶恋、当風恋の第一とす。

◎「文」（恋）

74 物をもいはす唱ナゲふ観音

一切心に叶はぬ果は仏道に立入ル。

△「立入る」

○唱ナゲふ観音 「南無観世音菩薩」などと観音の名号を唱えること。

75 鯨カズノコを楊枝のさきカズノコにほぜり出し

なまくさ仏法。

△「ほぜり」

◎「鯨」(春)

○鯨 数の子。鯨の卵巣。『本朝食鑑』(元禄一〇年刊) 卷八「鯨」によると、漁期は九、一〇月から二、三月まで、生のもは乾したものに及ばないので、ことごとく乾燥させるといふ。また「本朝流俗、歳首に家々数の子を以て規祝の一具と為して、子孫繁多の義に取る。」(原文の返り点、送り仮名にしたがって私に書き下した)とあり、正月など祝い事の時に用いた。○ほせる ほじくる。○なまくさ 僧としての戒を保たず墮落し、世俗的になっているさま。

76 お乳ウバノマユをませてとらす宝引

△「お乳姥」

◎「宝引」(春)

○宝引 福引の一種。多くの縄の先にいろいろな賞品を付けて引かせるものと、縄のうちの一本に橙などを付けて当りくじとするものがある。中世から近世にかけて、正月の遊びとして家庭で行われたほか、辻宝引など賭博的なものもあり、たびたび禁令が出された。『本朝文選』所収の許六作「四季辞」に「春宝引ヒキをせぬ人は。六月の蚊にくはるゝとて。しはき親仁もゆるされて。銭つかはずもことはり也。」とあるのは、家庭で行われた例である。

77 春雨に筆結比の花待て

筆ゆふは花の荅也。春雨、春の雨、連哥に二つ。

◎「春雨」(春)

○筆結 筆の穂先を整えることから、筆を作ることやその職人を用い、ここは注にある通り、花のつぼみを筆の穂先にたとえたもの。「筆ゆひのゑに／ふでゆふも花やくまぬ職がたき 季吟」(『統山井寛文七年刊』)。○連哥に二つ 『連歌新式追加并新式今案等』は「二座一句物」の中に「春雨」を挙げ、「春の雨」については言及しない。同書で「春風」が「春の風」と各一句とされているのと混合したか。

78 日に／＼長うのはす糸遊ふ

十分の春色なり。

△「春色也」

◎「糸遊ふ」(春)

○糸遊ふ 陽炎のこと。日ざしによって地面付近の空気が暖められて密度分布にむらができ、そこを通過する光が不規則に屈折するたために、向こう側が揺らめいて見える現象。漢語の「遊糸」に由来し、「遊糸」はクモの子が糸に乗って空を流れる現象を指すことから、日本でもこれを意味するという説もあるが、ここは前者の現象を指す。

○春色 春の景色。

名

79 昼事は畑に極めて通し駕

畑は箱根の畑也。昼事は昼めし也。

○通し駕 途中で乗り継ぎすることなく、ずっと同じ駕籠を乗り通して目的地までいくこと。貸し切りで豪華なものであった。

80 鐘もちあてて、下ル石突

樫木の岩角は磁石も吸ふべし。

○鐘もちあてて、「持ち当つ」は、思いがけずちようどよいものを持つという意で、持っていた槍がちようど役に立ったということ。○石突 太刀の鞘尻、長柄の鋒・薙刀・鐘・馬印などの地面に突き立てる柄尻の部分や、そこを包む金具を指す。地面や石畳に接していたむのを防ぐために付ける。○岩角 岩のかどや、岩石の突き出たところ。「磁石も吸ふべし」は、鐘の先の金属が、ごつごつした岩のかどにうまくはまることをいう。

81 河音に背中の汗の流れやみ

あつかりし日の涼しくなりたる事也。

△「背」ルビなし。「也たる」

◎「汗」(夏)

82 殿の昼寝の覚ぬ涼しさ

◎「涼しさ」(夏)

83 駒ひとつ頬にあてたる練将棋

お次の小性衆。

○練将棋 連将棋。対局者が双方二人以上の組になって交互にさす。

ここは実際には連将棋というわけではなく、小性の入れ智恵のあることをいうか。○お次 御次の間。主人の居室に隣接する予備の間で、付人が控えた。

84 隣の寺の近き晚鐘

市中の軒並ひ。

△「ちかき」

○晚鐘 入相鐘の略で、夕方の六ツ時につく鐘。ここは寺で勤行の時を知らせるもの。○軒並ひ 多くの家々が軒を連ねて建ち並んでいること。

85 森暮て鷺も烏も寝に帰り

万木にかぎらす。

○万木 万木の森。現在の滋賀県高島市安曇川町域付近とされ、町内の青柳にある与呂伎神社の辺りに比定する説もある(『日本歴史地名大系 滋賀県』「万木の森」)。歌枕として知られ、『歌ことば歌枕

大辞典』（角川書店、一九九九年）「万木の杜」には、「古今六帖」の「高鳥や万木の杜の鷺すらも一人は寝じと争ふものを」（第六・四四八〇）という古歌により鷺を詠む名所となった。（中略）また、ともに詠まれる鷺が白いことから、転じて「ある鷺はおのが色にやまがふらん万木の杜にふれる白雪」（為忠家後度百首・四七三・俊成）、「しづ枝までおりる鷺と見ゆるかな万木の杜に咲ける卯の花」（広言集・二三）の「雪」「卯の花」なども詠まれるようになった。」とされる。ここは、万木の森を連想しつつ、白い鷺とともに、黒い鳥が取り合わされている点が俳諧的。

86 足汁一荷担ふ村口

田家の夕暮。

○足汁 未詳。○村口 村の出入り口。

87 月代に須戸の焼場の紙の切

須戸寺の後に焼場あり。

△「切」

○月代（秋）

○月代 月が出ようというとき、光が反射して東の空が白みわたること。○須戸 須磨寺は摂津国須磨の上野山福祥寺の通称。漁師の網に引き上げられた聖観音像を安置するため会下山（現兵庫県神戸市）に北峰寺が建立され、それを仁和二年（八八六）に間鏡上人が

移建したという。平敦盛愛用の青葉の笛、旗、兵器を什物とし、在原行平および松風・村雨の旧跡地とも伝える。○紙の切 未詳。

88 岩乗かける舟の初汐

須戸の前わたり、海浅く播戸灘といふ。灘は海の浅きを

いふ。舟のりにくきゆへに、かならず怪我あり。

△「灘は」が「難は」。

◎「初汐」（秋）

○岩乗かける ここは、大潮だから大丈夫だろうと、船が岩を乗り越えようとするさま。○初汐 陰暦八月一五日の満月の満潮。潮の干満は、太陽と月の引力の影響を受けており、新月と満月の頃は太陽と月と地球がほぼ一直線に並ぶため、潮の干満の差が大きい。特に春秋の彼岸のときは太陽と月と地球が完全に一直線上に並ぶため、最も干満が大きくなる。ただし実際には、新月、満月から一三日ほど前後して最大潮差が観測される場合もある。○播戸灘 瀬戸内海の東部に位置し、兵庫県播磨平野の南沖合に広がる海域。○怪我 思いがけない失敗。過失。あやまち。

89 日本をぬけて羽のす雁の声

日本の地に休みて異国の方に羽のして渡。

◎「雁」句意から帰雁で春。

○のす 伸ばす。

90 判官逃て嶋の掣入

義経、女護嶋へ渡り給ふと云咄あり。

△「いふ」

○女護嶋 女だけが住むという想像上の島。御伽草子「御曹子島渡」に、主人公源義経が「大日の法」という兵法を求めて船出してめぐった島の一つに女護島が登場する。一行は、この島の女性たちに、島の守り神とするため殺されそうになるが、義経はこの後一〇万余騎の仲間の兵士たちがやってくるので、彼らをそれぞれの夫とした方が島の繁栄につながるだろうとだまして逃げ出す。

91 底抜の烏帽子繕ふ杭の先

烏帽子折の草紙。

○烏帽子折の草紙 幸若舞曲「烏帽子折」は読み物としても刊行された。ただし、この句に詠まれているような、烏帽子の底を繕うのに、杭の先にかぶせて縫う場面は出てこない。ここは前句の逃げ出す義経の姿から、烏帽子を繕うような事態にもなったであろうと興じたもの。

92 六ケの畑の祭近よる

六ケの畑の祭は多賀也。六ヶ村方御輿昇出。白張に烏帽
子数百人、毎年役目とす。

△「畑の祭近よる」

◎祭(夏)

○六ケの畑 小椋谷六ヶ畑で、君ヶ畑、蛭谷、箕川、政所、九居瀬、黄和田の六集落。滋賀県東近江市の愛知川上流に沿う溪谷一帯で、惟喬親王がこの地で輓轡の技術を柚人に教えたと信じられて、各地に散在する木地屋の根元の地と考えられていた。○多賀 滋賀県東部、犬上郡にある。近世には彦根藩と神領とから成り、多賀大社の鳥居前町として発展した。多賀祭は『誹諧初学抄』（寛永一八年跋）に「多賀祭（四月上ノ丑日也）江州犬上郡也」と記されるが、『増山井』など後の俳書には「上巳」とされる。○白張 麻布製の白い狩衣で、胡粉で粉張りした。寛文五年（一六六五）『諸社禰宜神主法度』（神社条目）では、無位神職の装束は原則として白張と定められているという（『有職装束大全』平凡社、二〇一八年）。

名ウ

93 蒜の汗を袂で拭ひ捨

△「蒜の汁」。

94 いやな上戸にはづる出女

△「はづす」

○はづす 相手の思惑や言動を予測して、それをかわす。ここは、嫌な客と会いたくないので席を離れること。前句からニンク臭い客を連想した。○出女 近世、宿場にいた宿屋の客引きの女性で、

売春をすることもあった。『本朝文選』所収の木導作「出女」説」にその風俗が詳しく述べられる。

95 小者共食喰きれと下知をして

旅籠屋の意趣討は、食を喰切事也。

○小者 室町・江戸時代に武家に仕えて雑役に従事した軽輩のもので、草履取や走り使いなどをつとめた。○意趣討 遺恨を晴らすために相手を斬ること。ここは、出女に相手にされなかった客を武士と見込んで「意趣討」の語を用いている。

96 関はなけれと明る逢坂

○逢坂 近江国の歌枕。山城国と近江国との境で、奈良時代以来逢坂の関が置かれ、畿内と東国との境界として交通の要地となっていた。関の位置については、特に近世に繰返し道が掘下げられたことから定かではない。現在、京阪電鉄京津線大谷町駅の東、国道一号の北側にある逢坂山検問所の脇に「逢坂山関址」碑が建てられているが、『更級日記』等に関寺の名は逢坂関に隣接していたことに由来するという記述が見えることから、関寺境内西端にあったとする説が有力になっている。南北朝時代以降は、園城寺の支配するところとなり、軍事上の目的よりも関銭徴収のための関として経済上重要な関となった。関の施設がどのようなものであったかは定かでないが、室町時代まで関屋の存在が確認できるという（『日本歴史地名大

系 滋賀県「逢坂関跡」。

97 花盛志賀の島のならみたち

逢坂の眺望。

◎花盛（春）

○志賀 近江国の琵琶湖岸南西部一帯の地名。天智天皇はここに志賀都（大津京）を営んだ。和歌においては「さくら咲く比良の山風ふくまみに花になりゆく志賀のうら波」（千載集・春下・八九・良経）など旧都の桜が詠まれ、『類船集』にも「志賀^{近江}」の付合語に「山桜」が挙げられる。○しらみたち ここは注の通り、逢坂から遠く見渡すと、志賀の畑は桜の花で煙るように白く見えるということ。

98 小舟漕込む霞浦く

榑崎^{つや}正源寺、兀翁^{つや}薩州加護嶋の詩に、浦々^{つや}烟^{つや}枯^{つや}舟入^{つや}。

松。

△「榑崎」が「樽崎」と記され、上欄に「榑か」と補記。「正源寺」が「高源寺」。

◎霞（春）

○浦く あちらこちらの浜。前句の「志賀」と「浦」は付合語の（類船集）。○高源寺 滋賀県犬上郡多賀町榑崎にある寺院。もとは天台宗であったが、慶長八年（一六〇三）彦根藩士宇津木氏が再興し、臨濟宗妙心寺派となる（『日本歴史地名大系 滋賀県「榑崎

村)。○兀翁、薩州加護嶋の詩 未詳。

※本卷は名残折裏に六句しか載らず、二句の脱落が認められる。

【前号の訂正】第四百韻二折裏六句目の自注について、「中」の音読譜号と「晴」のルビが欠落しておりました。左の通り訂正いたします。

42 梢にかゝる松の浮雲

山中の雨晴。^{パレ}